
ハイスクールD×D～紅蓮の錬金術師～

人間花火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D〜紅蓮の錬金術師〜

【Nコード】

N4373BA

【作者名】

人間花火

【あらすじ】

兵藤一誠の親友、時風篠がゆくファンタジーバトルアクション！！
カッとなってやった、反省はしているが後悔はしていない（キリッ
あまり叩かれすぎるとホコリどころか涙も出てきてしまいます（泣）

はじめに

わたしは人間花火《にんげんはなび》と申します。

処女作なので。生温かく見守ってやってくださいお願いします。

このページの使い方もよくわかりません（泣）

勢いでやってしまいました（汗）更新亀になるかもしれません。あと誹謗・中傷勘弁してくださいね。

皆さんが描いた小説を見てみるとすごくレベル高いなあと思いました。公開処刑ですね、分かります。

あと原作頑張って読めますがしばらくテレビアニメ沿いになるかもしれません。

ではお粗末かと思いますがよろしく願いします。

主人公設定

名前：時風 篠

武術：主に父親に叩きこまれた軍隊格闘術を使う。

装備：多種多様の錬成の定義がされた布。

錬金術：右手に硫黄の錬成陣、左手に水銀の錬成陣を持つ。更に手首に巻くように錬金術の輪になるものが刻んであり、構築式は指の腹に書き連ねてある。地面・金属系の元素定義が為されている。他にありとあらゆる錬成陣が記してある布を何枚も持っているため必要に応じて適した布を取り出し術を行使する。

性格・容姿：長い黒髪を後ろで一つに束ねたイケメン系目。普段は敬語だが真面目になったり怒ると目が少し開き口調も変わる。現役軍人でいるためか非常時にもナチュラルに対応できる。変態紳士。争い事は嫌う。17歳のくせに全てに於いて達観している。

身元：両親ともに軍人。自分が軍人であることを隠して学校生活を送っている。

親友である一誠しかこのことを知らない。

戦闘傾向：基本拳闘で闘い、必要に応じて錬金術（主に兵器、爆弾錬成）を役する。

得意：料理、スポーツ（戦闘）、駆け引き、諜報活動

不得意：勉強、情事（耐性は十分あるが苦手なだけ）

第一話　く日常く（前書き）

いやゝ、始まってしまいましたね。上手く描けるかガクブルですよ私……。でも頑張る！

第一話　～日常～

天気は晴天・・・そこに駒王学園の芝生に仰向けで横たわる男たちがいた。

「あゝ・・・おっぱい揉みて・・・」

項垂れるように呟くこの青年の名は「兵藤一誠」。顔は良いのにスケベなことしか頭にないため女子にはモテない俗に言う残念なイケメン・・・

「・・・はあ・・・いきなり何を言い出すのです？一誠？気持ちはわかりますが。」

この物腰の柔らかい敬語口調の青年の名は一誠の唯一無二の親友、「時風篠」。この青年も顔は良いが二次元に片足を突っ込んでいてエ○ゲーマーというこれまた残念なイケメン

「兵藤一誠君に同意！」

丸刈りで若干猿顔の青年は「松田」

「言うな・・・虚しくなるだけだ・・・」

片手で眼鏡をくいつと持ち上げ冷静に話す青年は「元浜」

「篠、松田、元浜・・・どうして俺達はこの学校に入学した？」

一誠が誰に問うでもなく呟くように言う。

「我が私立駒王学園は女子校から共学になって間もない・・・よつて、圧倒的に女子が多く・・・海外からの美人留学生も多数！そのため・・・男子は希少！つまり！黙っていてもモテモテなわけだ！それ即ちハーレム！」

「その通り！おっぱい溢れるリア充ライフ！」

「・・・の筈が彼女一人できないまま二年目の春を迎えちゃった・・・」

「虚しいものですね」。私も入学したての頃は結構行けそうな雰囲気

気だったんですけど・・・あなた方とエ○ゲートークばかりしていたらいつのまにか距離を置かれていましたからねえ・・・おや？」篠は何かに気づいたように運動部のランニングコースの向こうを見た。

「どうした我が同志時風よ！」

「松田君・・・いえ、ほらあそこ。」

「「ん？」」

「木場く〜ん、この後どうするの？」

「ねえ、一緒にお茶しに行かない？良いでしょ？」

駒王学園の制服を着たモブのくせにやけに可愛い女子生徒三人組が木場と呼ばれる男子生徒に話し掛ける。

「ごめん、これから部活なんだ。」

「え〜残念。」

「せっかく誘ってくれたのに本当にごめんね！また今度誘ってよ」

「「はあ／＼／＼／＼格好良い／＼／＼」」

あんなベターな会話を交わすだけで女子生徒のハートを射ぬいてしまつ。

「2年C組木場祐斗・・・全女子生徒憧れの対象にして・・・」

「我々全男子生徒の敵！」

元浜の言葉に繋がるように松田が言う

「くっそー！ちょっと顔が良くて頭も良くて性格が良くくらいで入れ食いしやがってー！！」

「一誠・・・十分なモテ要素なのでは？・・・」

「言つな・・・虚しくなる・・・」

元浜が悲しそうに眼鏡を直す。

「あゝ世の中不公平だよな」
一誠が頂垂れていると

「お！そろそろ時間」

松田が何か荷物を持って芝生を出ようとする。

「どこにいくのですか？松田君？」

篠が問いを掛ける。

「………むふう」

松田がまるでこの世のものでないかのようないやらしい笑みを浮かべる

「「「？」「」」

場所は変わって体育館裏？

「村山の胸ちょーでええ」

松田が興奮しながら言う

「80 70 81」

元浜が眼鏡で分析？する。

「片瀬！良い脚してんな」

「78 65 79」

「体育の時間、偶然見つけちゃってさ」

そう……この男は体育館に通じる女子更衣室に穴が空いていたのを見つけ時間を見計らって覗きをしていたのだった。

「コラ！俺達にも見せろ！」

松田のみつともなく出た尻を掴み引き出そうと試みる一誠。

「いや！私は別に見なくていいです。フラグが立ってるんで。」

軍人としての危険察知能力だろうか篠は断りを入れる。

「一人占めすんなっての！おい！！！」

「おい！！！」

「えっ？」

「何今の声！？誰がいる？」

「「やべっ」「

「のわあ！？」

ドサッ

覗いていた松田と元浜はいきなり突っ込んでいた体を抜き逃走を図る。

中の様子が分からなかった一誠は二人を穴から引きはがすのに夢中だったので突然二人がどいて、勢い余って倒れてしまった。

「いつてて・・・ったくなんだよ松田あ！元浜あ！篠あ！」

「・・・またあんたらかあ！」

怒気を含んだ声を出す女子剣道部員

「このお・・・」

「エロ猿！！！」

竹刀を一誠に向けて構える女子剣道部員達

「「ら」つて・・・え？まじで？ちょ・・・待つてぎやあああああ
あああああ！！！」

「いつてて・・・竹刀で殴るかふっ・・・」

「災難だったな一誠」

「置き去りにしやがつて！これでおっぱいの一つも見れたなら納得
もしようが見てもいねえのにこの理不尽・・・」

「どうしたんですか？一誠上なんか見て・・・！？」

「あ・・・」

窓の中から自分を見るのは紅髪の美女だった。

「・・・」

窓から青年たち・・・いや、一誠を見つめる紅髪の美女。

「旧校舎に人がいたんだなあ・・・」

「いいなあ・・・あの真つ赤な髪・・・」

ニヤける一誠

「リアス・グレモリー。99 58 90。3年オカルト研究部部长。出身は北欧という噂だ。」

元浜が解説する。

「グレムリン？何ですかそれは怪物ですか？」

「グレモリーだ！時風！」

「ああ、すみません」

（・・・リアス・グレモリー・・・今私を感じたものは一体・・・

）
はしゃぐ三人を余所に一人だけその紅髪の美女がいた窓を訝しげに見つめる篠・・・

「気のせいですよね・・・まさか・・・人の気配がしなかったなんて・・・」

「今の子・・・」

紅髪の美女がチェスの駒を手に持ちながら口を開く

「はい？・・・」

「左から2番目にいた子よ・・・それと・・・」

（人間の男はみんな私に同じような視線しか向けないけれど・・・あの糸目の子は何か違ったわね、何て言うのかしら、私を調べるように見ていた・・・眼で見るだけで全てが分かるはずなのに・・・

）
「2年B組の・・・確か兵藤とかいう・・・あの男の子が何か？」

「・・・いえ、勘違いだと思うけど・・・ね・・・チェックメイト！」

この時、一誠と篠、どっちに向けて言い放ったのかは分からない。

第一話　く日常く（後書き）

ふむ・・・まあこんなもんですか・・・どうでしたかねえ。
オリ主もうちよつとセリフ入れたほうがいいすかね？

やっぱ二次小説難しいな
ではまたノシ

日常の崩壊（前書き）

小説買いました。まず一巻だけ。

気づいたんですが・・・アニメ規制しろよ（笑）

何ですかあれは、もう色々突っ込みたいですよ全く・・・

日常の崩壊

「はあ、暗い青春だ・・・このまま俺の学園生活は花もなく、おっぱいに触れることなく終わるのか。」

夕日が綺麗なとある歩道橋で手すりに頬杖を突きながら佇む一誠。

「仕方ないですよ一誠。私達はモテる努力を怠っていたんですから・・・」

「モテる努力って何だ、篠？」

「・・・私にも分かりませんよ。」

「はあ」

「まあ、きつといつか良いことがありますって！」

「その言葉・・・何回聞いたり言ったことか・・・」

（こんなに落ち込んでいる一誠なんて、らしくありませんね。何か元気付けられないでしょうか・・・）

篠が思案していると・・・

「あ、あの！」

「んあ？」

「はい？」

「駒王学園の兵藤一誠君・・・ですよ・・・？少しお話したいことがありますが・・・」

「ん・・・はい？何か用ですか？」

（見慣れない制服だな・・・どの学校だ・・・？って可愛い）

（えーと・・・用があるのは一誠の方のようですね・・・有り得ないとは思いますが、念の為にしておきますか・・・）

「一誠、私用事を思い出したので行きますね？」

篠が気を遣いその場を退く。

「お・・・おう！じゃあな、また明日学校でな！」

「はい、さようなら一誠。それとその君も」

篠が付け足すように女の子にも別れを告げる。

「はい、さようなら。」

篠の後ろ姿が遠退いていく。

「それで、話つて？」

「えっと、その……！……兵藤君って今付き合っている人はいますか……？」

女の子が意を決したように口を開く

「え！？別に居ないけど……」

一誠がバツが悪そうに言う。その言葉に女の子は

「良かった」

「ええ！？」

いきなり安堵するような発言に一誠は驚いてしまった

「あの……私と……付き合っていただけませんか？」

「なっ！？」

（ちよつと待った何だこれ何だこの状況！これは所謂告白？告白なのか！？）

「えっと……ごめんもう一度言ってくれろ？」

戸惑いながら復唱をお願いする一誠。

「私と……その……付き合って頂けませんか……？」

恥ずかしそうに一誠の要望に答える女の子

「ま……まじすか……！……！？」

「オキナサイ！オキナサイ！オキ……」

いつもの目覚まし時計で体を起こす一誠。いつもならマンネリ化した一日が待っているのだが今日の彼は様子が違った。何故なら……

・
「ぬふふ……ぐふふ……うへえ……」

先日の松田の顔に負けず劣らずいやらしい笑みを浮かべる一誠。

「な！なににい！！！！？？？？」

「何故・・・！？？」

「おやおや」

驚きを隠せない一誠以外の三人組。それはそうだろう何せあの一誠が女の子と並んで登校してきたからだ

「あ、この子、天野夕麻ちゃん」

何やら得意気に話す一誠

そして夕麻に三人を紹介する

「こいつら、俺のダチの時風と松田と元浜」

「よろしくね？」

天使のような満面の笑みを浮かべる天野夕麻と呼ばれる美少女固まる松田と元浜、それに追い討ちをかけるように続ける一誠

「一応・・・俺のか・の・じよ。」

「彼女」を強調しながら言う一誠

「じゃ、行こう？夕麻ちゃん？」

「はい！」

三人に会釈して自分の彼氏・・・一誠の後を付いていく

「裏切り者めえ」

「ぐわはあ！」

血？の涙を流す松田と元浜

（何なのですか・・・あれは・・・あれは有り得ない！天野夕麻・・・一体何者ですか・・・分かりません・・・）

先日のリマス・グレモリーと同様のものを感じ一人問答をする篠

（何事もなければ良いのですが・・・しばらく・・・様子を近くで見えますか）

・・・放課後

とある夕暮れの歩道橋・・・

「デート！？」

「うん・・・駄目・・・かな？今度の日曜日。」

「いやいや全然良いよ!」

「良かった」

「じゃあまた・・・!」

嬉しそうに掛けていく彼女の背中を見つめる一誠

「デート!楽しみにしてるね!」

立ち止まり、そう言う彼女・・・

「うん・・・おれも・・・」

「んゝ!! やったあデートデート! 何ていい響きなんだ!」

歩道橋を下りていく一誠。

「ペろ・・・」

その姿を棒アイス舐めながら眺める小柄の少女がいた・・・

「そう・・・」

「やっぱり部長の勘は・・・?」

先程の少女が言う

「正鵠を射ていたと・・・?」

黒髪のポニーテールの美女が続ける

「あなたに見張らせていたのは正解だったようね・・・」

部長と呼ばれるその人リ阿斯・グレモリーは言った

「部長どういたします?」

「下ごしらえだけはしておくわ・・・けど・・・あとは彼次第ね・・・」

「」

「そろそろ時間なんだけど・・・」

私服で外を出歩くのはおそらく久しぶりであろう一誠はそわそわしていた

「お願いしまゝす」

街中で何か紙を配るバイトらしき女性。それを受け取る一誠

「あゝつい取っちゃった・・・ん・・・? なになに・・・? あなた

の願い叶えます？うえっ！怪しさバリバリ・・・」

「一誠君・・・！」

「あ！おはよう夕麻ちゃん！」

紙をポケットに入れる

「ごめんね？待った？」

息を切らしながら尋ねてくる夕麻

「全然！待ってないよ！今来たところだから」

「良かった」

（くうく一度言ってみたかったんだよなこのセリフ！）

「じゃあいこうか？」

「うん！」

夕麻の手を引く一誠

夢にまで見たデートが始まる。

商店街に行き洋服を買ったりパフェと一緒に食べたり、それはもう

楽しそうだった。

そして日も落ち辺りも暗くなったところ・・・

「今日は楽しかったね！」

「ああ！最高の一日だったよ！」

二人で歩きながら話す。手が触れるか触れないかの距離・・・

「ここが漢の見せ処！」

一誠は意を決し彼女と手を繋ごうと試みる。

ギュッ・・・

「あ・・・」

「やったあああ！握ったぞ！手え握ったぞ！」

手を繋ぎながら歩く一組のカップル

すると噴水があるところに来た、彼女は一誠が握っていた手をいつ

たん離し噴水の元へ駆ける

「ねえ一誠君・・・私達の初デートの記念に一つだけ私のお願い聞いてくれる？」

「！？」

(これってもしかして・・・キ・・・キ・・・キ・・・！)

「な・・・何かな？お願いって？」

期待に胸を膨らませながら彼女の言葉を待つ

「ふふ・・・」

「・・・死んでくれないかな？」

日常の崩壊（後書き）

疲れますね中々・・・

だげど負けません！そして次回ついに主人公が戦闘を！
戦闘描写難しそうなので不安です・・・まじで・・・

日常の崩壊／死刑宣告／（前書き）

ではよろしく願います。

日常の崩壊／死刑宣告

「死んでくれないかな．．．．？」

「え．．．？」

一誠は戸惑いながら

「ごめん夕麻ちゃん．．．もう一回言ってくれないかな？俺の耳変だわ」

聞きなおす一誠

「死んでくれないかな．．．？」

（間違いない．．俺の耳は変じゃなかった！いやでもちよつと待つて．．ええ！？死んでつて．．．）

その瞬間夕麻は何か黒いものに包まれ、あつという間に布の少ない服装になつてしまった

そして黒い翼を背中に生やし少し離れたところにゆっくりと着地する．．．

（は．．．ね．．．？）

（まずいことになりましたねえ．．まさか突然死刑宣告とは．．一誠には悪かったですが尾行しておいて正解でした．．．）

近くの茂みに隠れているのは一誠の親友．．篠

デートの最中ずつと気配を消し二人の尾行をしていた

（何事もなければ良かったなど．．自分に腹が立ちます！分かっていたはずです！彼女が人でないなにかなど！分かっていたのにこの体たらく．．ぬるま湯につかりすぎていましたかね．．）
静かに自分で自分を叱咤する篠

「しかし！猶予はありません！あの女が何かをしてくる前に．．出る！」

「楽しかったわ．．あなたと過ごした初々しい子どものままことに

付き合えて」

妖艶に一誠を見下す天野夕麻

「あなたが買ってくれたこれ・・・大事にするわね・・・」

「ゆ・・・夕麻ちゃん・・・」

夕麻の手には光が集束し一本の槍になる

「ーーーーー待って頂きたいですね!」

「!?!」

ガシャァン!!

どこからか鎖が伸びてきた・・・夕麻はこれを難無く後ろに跳躍し避ける

バチバチ!

錬金術による錬成反応音が鳴る・・・

「し・・・の・・・?」

一誠と夕麻の間に歩き立つのは親友の篠。一誠はまた訳が分からなくなつた

「なんで篠がここに!?!」

「すみません一誠。不躰かと思いましたが尾行させてもらいました・・・」

夕麻を睨む篠

それを余所に

「尾行・・・?なら私が気付くはず・・・この子一体・・・」

「あなたは一体何者ですか・・・?天野夕麻・・・」

「私?それをあなたに答える筋合いがあるの・・・?人間!」

光の槍を投擲してくる夕麻

ビュン!

「くっ!」

篠は片手を地面に置く

バシィ!

自分と一誠を守るようにして錬金術により鉄の壁を作りだす・・・だが・・・

バガン！ガラガラ・・・

光の槍の投擲を防ぎ切れず鉄の壁を粉碎する。

「ぐああ！」

後ろに吹き飛ばされる篠

「あなた・・・面白いことをしているわね・・・糸目君？」

光の槍を再び集束させ構える夕麻

（鉄をも砕く槍ですか・・・しかしあんな槍見たこともありませんね・・・光ってますよ・・・正攻法では一誠に被害が及ぶ・・・！小細工をしましょうか・・・）

ヒュッ！

「！？」

身構える夕麻を余所に、先程あつた噴水の傍に高速で移動する、篠は胸ポケットから布を取り出し、噴水の水に浸ける。

「何を？」

不思議そうに見る夕麻

バシィ！

ポォン！！

「何！？水煙？とんだ小細工ね！目暗ましのつもり！？」

ビュンツ！

「な！？いつの間に・・・！？」

篠は夜目が利くので水煙の中確実に夕麻の懐に接近していた

「はあっ！！」

掌底を夕麻の腹に打ち込む！

「ぐ・・・ああ・・・」

ドゴォン・・・！！

掌底を食らい吹き飛び、噴水にぶち当たる夕麻

「はあはあ・・・く・・・手応えが少ししかありません・・・」

苦い顔をしながら言う

「本当にやるわねえぼうや・・・？面白いわ・・・けど・・・」
水に濡れた体をお構いなしに立ちあがってくる夕麻

「・・・けど？・・・はあ・・・んく・・・」

「本気を出してないみたい・・・」

「何・・・？」

「それは一体どういう意味でしょうかねえ・・・！」

怒気を含めながら言い放つ篠

「そのままの意味よ・・・あなた・・・私を殺す気・・・ある？」

「！？」

「ないでしょうねえ」

「だったら何だと言うんですか！？」

「本気にさせるには・・・これしかないわよね・・・？」

ヒュン！

槍を一誠に向けて投げる！

「まずい！一誠！！」

（動きすぎました！！あの女から一誠を背に、守るようにして闘っていたのに・・・！！くう！）

ドブシュッ！！

「ぐ・・・あ・・・あ・・・ぐふ！！」

ドサッ！

（一誠が・・・刺された・・・くそ・・・！！）

「一誠！！」

光の槍に刺された一誠に駆け寄る・・・

「一誠！一誠！」

「あ・・・ぐ・・・篠・・・」

「俺・・・死ぬのか？」

（この傷口は・・・くそ！何か・・・！何か手立ては・・・考える・・・考える・・・思考を止めるな！！）

「楽しかったわ・・・素敵な思い出ありがとう・・・ふふ・・・

あなたもね・・・糸目君？」

夕麻は微笑みながら言い、その場から消える

「あああああああああああああああああああああああ
ああああああ！！！！！！！」」

――慟哭・・・篠は悔しくて叫んだ・・・たった一人の親友を亡くした・・・

「あ・ ・ ・ あ・ ・ ・」

「!？」

一誠はまだ生きていた・・・風前の灯だが・・・

「誠！」

「篠……俺……こんなところで死ぬのは……い……やだ……」

「こんな……おっぱいも揉めずに一生を終えるなんて……」

「こんな時に何を言っているのですか！もつと他に言つことあるでしょう！！？」

「一番の心残りだつ……た。」

「誠！」

その時二人の背後で眩しい赤い光が灯った

その赤い光の中心に一人の美女が舞い降りた・・・

「あなたね？私を呼んだのは？」

「どうせ死ぬなら・・・私が拾ってあげる・・・あなたの命・・・私のために生きなさい・・・」

「また次から次へと……何なのですか……あなたは……」

これ以上、誠の死体を弄ばまいと臨戦態勢を取る篠……

「これでよし・・・と・・・あなた・・・は死んでいないのね・・・あれを追い払うなんて大したものだわ・・・」

「追い払ってなんかいませんよ……見逃されただけです。と言う

「より一誠に何をしたのです？」

不貞腐れたように言う篠

「人間には教えられないわ」

「あなたは……あれは一体何だったのですか？」

「人間には教えられないわ・・・」

「では一つよろしいでしょうか？」

「何かしら」

「あなたは先刻のあれと同類ですか？」

ピシッ！

空間が砕けたと錯覚するほど周囲の空気が変わった

「あれと同じにされるのは心外だわ・・・」

静かだが怒っている

「む・・・気に障ったのなら謝ります。なに分あなた方のような人外と対面するのは初めてでして・・・初回は許していただけですか？」

「・・・分かったわ・・・そちらの言い分も最もだし許すわ・・・でも二度目はないわよ？」

「はい。」

「それにしてもあなた物怖じしないのね・・・」
パアアアア

リアス・グレモリーの辺りが光り始める。戻るのだろう

「・・・何も聞かないのね？その子をどうしたの」とか

「人間には教えられないとおっしゃったのは他でもないあなたじゃありませんか・・・」

「ふふ・・・それもそうね」

リアス・グレモリーは消え、その場は二人になる

「一誠を運ぶとしますか・・・」

日常の崩壊／死刑宣告／（後書き）

う．．．．うう．．．（泣）

全然上手く描けません．．．

戦闘描写難しい．．．

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373ba/>

ハイスクールD×D～紅蓮の錬金術師～

2012年1月12日22時51分発行